充実の救命救急医療 障害者雇用も充実

—社会医療法人財団慈泉会 相澤病院—

職場ルポ

WORKSHOP REPORT

（文）清原れい子（写真）小山博孝

社会医療法人財団慈泉会 相澤病院
〒390-8510　長野県松本市本庄2-5-1
TEL　0263-33-8600　FAX　0263-32-6763
URL　http://www.ai-hosp.or.jp

救急医療の「完璧」をめざして

北アルプスを望む城下町・松本。旧開智学校など進取の気風に富んだ地で、明治時代、一軒の医院が開業した。その医院は戦後、法人となり、今日では年間、ドクターヘリの搬送一三〇機余、五六〇〇台の救急車を迎え入れる――。

昨年一〇〇周年を迎えた社会医療法人財団慈泉会「相澤病院」は、病床数四七一床。常勤医師一三六名、看護師五九七名、職員総数は一四〇〇名余。救命救急センター、PETセンター、消化器病センター、がん集学治療センター、心臓病大動脈センター、総合リハビリテーションセンター、腎臓病センターなど各医療分野を網羅し、最新の医療設備・機器を備えている。

七対一の看護体制、開業医との電子カルテ・画像伝送システム、急性期リハビリテーションなども充実。民間病院としては全国三番目に地域医療支援病院の指定を受け、日本医療機能評価機構認定病院でもある。

患者のたらいまわしなど、救急医療が全国的な問題となっている昨今、救命救急センターは二四時間三六五日休みなく、患者を受け入れている。取材の間にも、救急車が何台も行き来した。

相澤孝夫病院長

四代目理事長・病院長の相澤孝夫さんの医療への熱い思い。

「自己判断で重症度はつかめませんから、駆け込んだすべての患者さん一人ひとりにとって、『そのときこそが救急』との思いで、救急医療を中心とした医療を行っています。重症とか軽症、歩いてきたとかヘリコプターできたとかは関係なく、いま困っている人、症状が心配な人にいち早く医療のプロがかかわって対応することが救急医療の原則だと思います。少しでも皆さんに良かったと思っていただけるように、一歩一歩前へ行くこと。完璧を目指して努力することが重要だと思っています」

今回取材の障害者の雇用について。

「父からは、感謝の気持ちをもって、謙虚に人生を送っていくことが大切だと教えられました。人間は一人では何もできません。協力しあって、ひとつのものをつくっていくことがとても重要だと思います。洗濯する人、皿を洗う人、データを正確に打ち込む人がいなければ、病院は成り立ちません。そういう仕事をやってくださるのは本当にありがたいと思います。働いている人の顔が生き生きしているのが、一番うれしいですね」

地域の人々に信頼され、最先端の医療を提供する病院が、障害者雇用に本格的に取り組み始めたのは二〇〇六年のことだった。

「指導」を受けて本格的な取り組みへ

当時、働いていたのは身体障害者二人と知的障害者（食器洗浄業務）が一人。相澤病院の障害者雇用率は低かった。地元ハローワークから「もっと雇用を」との指導を受けて、法人事務局人事部長の大久保富美江さんをはじめ、人事部で真剣に雇用を考え始めた。〇六年一〇月には、人事部の藤原悟さんが障害者就職面接会に参加した。

「これは、たいへんなことだと思いました。藤原が参加した面接会で二人の知的障害の人たちとの出会いがありました。病院全体で障害者の雇用を推進していこうと理事長にも話をしまして、管理

者の運営会議で、それぞれの職場で障害者を雇用できる仕事があったら挙げてほしいと働きかけました。その中にリネン、食器洗浄、デイサービスの介護職があり、リネンで二人を、介護職で身体障害者一人を採用しました」

一二月からリネン業務で職場適応訓練を行い、翌年一月にはトライアル雇用に移行、四月に本採用した。

「職場の人たちが彼女たちをかわいがってくれて、職場環境がよかったことと、二人が明るく、人なつっこい性格でしたので、うまくマッチングができたのだと思います」

その二人、八鍬裕美さんと山田かおりさんは、長野県雇用開発協会が運営する松本障害者雇用支援センターに訓練に通っていた。病院との橋渡しは職業準備訓練指導員の塚田正明さん。

「障害者を特別視しないで下さい。一般の人と一緒です。理解の仕方が遅いことはありますが、自分の子どもという思いで面倒をみてください。一度に複数の仕事の指示を出さず、仕事ができたら必ず報告させてください。我々はいつでも支援にまいりますと、打ち合わせ会議を開いていただき、障害者を雇用するうえでの注意をお伝えしました」

大久保富美江人事部長

さわやかサポート課で活躍する八鍬裕美さんと、山田かおりさん（写真右）

洗濯物の回収と配達、洗濯、洗濯物のたたみと、二人は順調に慣れていった。

「仕事に慣れるまでは、指導者を決めてマンツーマンで教えてもらい、回収や配達も一緒に行っていただきました。『楽しいか？』と聞いたときに、すぐ『楽しいです！』と返ってきましたから、定着できるだろうと思いました。みなさんから愛情をもって接していただけたことがいちばん大きかったと思います」

大久保さんも、二人の仕事ぶりに安心した。

「二人が素直で、うまく職場に適応できたことが、その後の障害者雇用の拡大につながったと思います。いま障害者は一三人働いています。できるところから障害者を受け入れて広げてきたことがうまくいったのではと思います」

洗濯物の回収作業をする山田さん

ていねいにタオルをたたむ八鍬さん

「ずっと働き続けたい」と笑顔の二人

ベージュや淡いピンクの暖色系をベースとした病院内は明るくやわらかな雰囲気で、消毒のにおいがしない。随所に絵が飾られ、食堂はレストランのようだ。

食堂では小林純二さん（写真左）と千野里沙さんが食器洗浄に忙しく働く

八鍬さんと山田さんは勤め始めて三年目。八時に出勤。八時二〇分から朝礼。掃除をしてから、洗濯物を回収して洗濯機に。九時半から各病棟からリネンを回収して洗濯、宿直のドクターたちのシーツ交換、お昼の休憩、タオル回収……と一日の仕事が続く。今は、病棟内のリネンステーションを一人で回る。

「さっきは患者様が使ったタオルを回収してきました」「仕事は慣れました。重いので、回収はたいへんです」「行き先がわからなくなった患者様には案内しています」「仕事は楽しいです」と二人。笑顔がすてき。

患者からは「リネンの人はいつもニコニコしてあいさつしてくれる」との反響が届く。

「旅行費を貯めています。友達と名古屋の水族館に出かけてお泊りしたり、八月も二泊三日で長島スパーランドに行くため、貯金しています」と八鍬さん。四月からホームヘルパー二級の資格を取るための勉強を始める。

「給料をもらったときは、洋服を買ったりします。おしゃれは楽しい。働いていて、困ったことはないです」と山田さん。

「定年まで働きたいです」「私もおんなじです」と二人。上司のさわやかサポート課課長の伝田豊さんは昨年七月に現職に就いた。

「病院にはいろいろな方が見え、具合の悪い方もいらっしゃいますので、『時間に余裕があるときは助けてね』と話していますが、場所を教えたりとかしていますね。前任者からの引き継ぎで、感じたことを書いたノートを交換しています。お休みの日どうしている、とかできるだけ話をするようにしています」

〇八年の障害者就職面接会でも二人の知的障害者を雇用、食器洗浄業務に配属した。

専門を生かして働く

知的障害者五人のほか、身体障害者七人が福祉相談、事務や事務補助、看護師、薬剤師、介護業務で、精神障害（発達障害）者が入力業務で働き、障害者雇用率は三年間で急上昇、二・五%を超えた。

鹿島有敏さんは福祉専門学校を卒業後、〇二年に就職して、医療福祉相談を担当している。脳性マヒで、歩行のとき両手クラッチを使う。

「福祉職に就きたいと考えていました。患者として相澤病院にかかっていて、主治医の先生が福祉を勉強していたことをご存知でしたので、声をかけていただきました」

近年、病院内で役割が高まっている責任あるポストだ。

「いろいろな悩みを抱えている方々がこられますので、まずしっかりお話を聞かせていただきます。私は物心ついたときから障害をもって生活していますが、中途障害を負われて突然の変化に戸惑われて、どうせわかってもらえないだろうという思いをお持ちの患者さんもいらっしゃいます。そういうとき、私の体験をお話して、がんばってみるというお答えをいただくと、良かったと思います。外来で元気な姿をお見かけすると、うれし

医療福祉相談を担当する鹿島有敏さん

くなります。やりがいがありますね」

勤務時間は八時から一五時まで。同じフロアで仕事をしている院長補佐の池田隆一さんは、厳しく温かく見守っている。

「普通に仕事をするパートナーとして働いてもらっています。体に負担があるということで、勤務時間を短くして、その時間内で責任をもった仕事ができるように環境を整えました。自身の障害を認めながら仕事をすることで、患者さんにも職員にもいいコミュニケーションが図れるのではないか。逆に世の中には障害をもっていると相談するにも不安感を持つ人もいるので、その辺は見極めて仕事をしなさいと話しました。社会福祉士の国家資格取得に向けて努力していますから、応援したいと思います」

「彼は変わったと思います」と大久保さん。

「患者さんから話ができて良かったと言われるとうれしいでしょうし、がんばらなければと思うのでしょう。とてもいい顔をして、仕事をしていますね」

奥寺さんの仕事ぶりを好評価する、上司の宮島誠腎臓病センター科長

奥寺哲さんはコンピュータ専門学校卒。〇六年七月に就職して、腎臓病センターでデータ入力業務を担当する。半日勤務から徐々に仕事に慣れ、本人の希望もあり、フルタイムで働く。上司の腎臓病センター科長の宮島誠さんから。

「医師や看護師が手書きした透析記録を電子カルテにするためのデータ入力をしています。コミュニケーションは苦手のところがありますが、集中力がすごいですね。以前は三人でしていた仕事を、いまは二人で担当しています。正確で処理能力が高く、十分に働いてもらっています」

奥寺哲さん。正確で処理能力が抜群だ

主治医の近くで働ける安心感も

健康センターで事務補助の仕事をする奥義和さんは上下水道の配管工事で働いていて脳出血で倒れ、左上下肢が不自由に。〇七年一二月からジョブコーチ支援、トライアル雇用を受けて、採用が決まった。そのときは思わずガッツポーズだったとか。

「奥さんの場合、障害のために何ができて何ができないという職業評価をきちんとしていただいたことが良かったと思います」と大久保さん。就労支援側は、本人情報をきちんと雇用側に伝えることが不可欠だ。

日々の業務は、人間ドックの申込者に一日ドック、二日ドックの案内を発送すること。

「畑違いの仕事で、戸惑いもあり、正直不安でしたが、ここで仕事ができて良かったと思います。体調は安定していますが、座りっぱなしの仕事ですので、首や肩、腰が痛くなります。今まで以上にがんばっていければと思います」

休日の楽しみは、ドライブしながらのバス・フィッシング。隣席の熊谷和久さんが仕事の指導をした。

「障害をもった人への対応は初めてでしたから、どの程度の仕事ができるかが

左上下肢が不自由な輿義和さん。隣のデスクの熊谷和久さんのアドバイスを受けて仕事を進める

わかりませんでした。ミスがないようにと指導してきましたが、予想していたよりもミスが少ないですし、仕事にも向上心をもって取り組んでいます。これからはさらに間違いを少なくして、やりやすいように仕事を工夫して、能率をアップしてもらえたらと思います」

相澤病院は、早期社会復帰をめざす急性期リハビリテーションも充実。輿さん、鹿島さんは患者として通っていた。主治医は高次脳機能障害に造詣が深い、総合リハビリテーションセンター長の原寛美さんだ。

「輿さんは脳こうそくを発症して、私の外来にずっとこられていて、ハローワークの障害者枠で登録していましたが、就職できませんでした。かなりブランクがあり、ジョブコーチやトライアル雇用を使いました。いまも二カ月に一回、外来にきていただき、仕事の状況も聞いています」

「鹿島君は脳性マヒで、外来に通院していましたが、前人事部長のとき、医療ソーシャルワーカーとして働けないかと提案させていただき、採用が決まりました。自分の経験が生かせる職場ですので、良いサービスを提供できるようにと話しています。車いすにしようかとの相談を受けましたが、自宅も近いので、両手クラッチでがんばっていますね」

原寛美総合リハビリテーションセンター長

主治医の近くで働けることはとても恵まれている。

「二人とも家庭のサポートがしっかりしています。リハビリを受けて、働きたい若者はいっぱいいますから、一人でも多く就労できたらいいですね」

できるところから職場を広げ、雇用率二・五％超

障害のある人たちの一生懸命働く姿は、他の職員にもいい影響を与えていると大久保さんは感じている。

「鹿島君にしても、一生懸命働いている姿を見ると、同じ職員として逆に勇気をもらい、もっとがんばらなければと思います。各職場の上司が教育していますが、ヘルパー二級や社会福祉士の資格など、それぞれの目標を持ってチャレンジしているのはとてもうれしいことですね」

藤原さんも担当として力を注いできた。

「病院は専門職の集まりですので、最初は知的の方はむずかしいかと思っていたのですが、各部署にお願いしたときに責任者の方が快く引き受けてくれて、職場の方も理解があると感じました。今ある部署で仕事を生み出していくほうがスムーズに受け入れられると思いましたし、十分勤務できることもわかりました。レクリエーションのボウリング大会や病院全体の懇親会に参加して、楽しんでいるのを見るとうれしいです」

大久保さんは障害者雇用が進んだ要因を。

「職場とのマッチングができたこと、障害者雇用支援センターと協力ができたこと。トップの理解の下、みんなで協力して、連携を取りながら進められたことが大きいですね。できるところから広げていけば、障害者が働く職場はあると思います」

雇用率は二・五％を超え、病院全体に障害者雇用への理解は広がってきた。四月には聴覚障害の看護師が新卒で働き始める。お話をうかがった方々は、みなさん前向き！

「職員一人ひとりが生き生きと仕事を行い、皆でそのエネルギーを結集することにより、夢と感動と輝きに満ちた病院にしていきたい」という病院長の思いも広まっていることが伝わってきた。